新制
文
529

学位審査報告書

（ふりがな） 氏　　名	さとう　けいた 佐藤　慶太
学位（専攻分野）	博士（文学）
学位記番号	文博　　第　487　号
学位授与の日付	平成21年11月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	文学研究科 思想文化学専攻

（学位論文題目）

カント『純粋理性批判』における概念の問題

論文調査委員	主査　准教授　　福谷　茂 副査　教授　　伊藤　邦武 副査　准教授　　出口　康夫

文学研究科

氏　名	佐藤慶太（さとうけいた）

（論文内容の要旨）

本論の目的はカント『純粋理性批判』の構造をそこで使われている「概念」という言葉がはらむ二重性に焦点を合わせて浮き彫りにすることである。

カントの認識論とそれ以前のものとを峻別するのは、「カテゴリー（純粋悟性概念）」の理論であるといえる。「カテゴリー」においては、概念と対象との関係はもはや単純な〈対応〉という仕方では捉えられない。「演繹論」の議論を見れば分かるように、「カテゴリー」とは、総合によって認識が成立する際に働く「機能（Funktion）」であり、近世の哲学者たちがいうところの「抽象観念」（ロック）や「明晰判明な観念」（ライプニッツ）と同一視することはできない。同様に、「カテゴリー」の本質を「像」や「定義」のうちに見ることもできない。カントの「カテゴリー」は、それ以前の概念の枠組みから完全に抜け出している。

『純粋理性批判』における「批判」とは、「原理からの、形而上学一般の可能性ないしは不可能性の判定、そして形而上学の源泉ならびに範囲と限界の規定」を意味する。「批判」の目的は、形而上学を一掃することではなく、それまでの形而上学の誤謬を暴露しつつ、新たな形而上学を構築することにある。このように『純粋理性批判』においては、形而上学をめぐる二重の手続き――旧来の形而上学の誤謬暴露と新たな形而上学の準備――がなされているわけだが、注意すべきは、旧来の形而上学と、新たな形而上学とが、同一の構造をもつものとして理解されている、という点である。このことは、カントが「形而上学」を「体系的な連関をなす純粋理性からの、すべての(真の、ならびに見せかけの wahre sowohl als scheinbare) 哲学的認識」と定義していることからうかがえる。『純粋理性批判』は、「見せかけの」形而上学の誤謬を暴露して、「真の」形而上学の構築を狙うが、ここで両者は「体系的連関をなす純粋理性からの、すべての哲学的認識」という規定を共有している。そしてこの「哲学的認識」は「概念からの理性認識(die Vernunfterkenntnis aus Begriffen)」と定義される。要するに、解体されるべき形而上学も構築され

るべき形而上学も「概念」に立脚する認識という点で、同形的な構造を有しているのである。ここに概念という言葉の二重性が認められる。

それゆえ旧来の形而上学における「概念」と、新しい形而上学における「概念」は同形的な構造を持ちつつも、しかもそのうえで区別されるのでなければならない。カントの「カテゴリー」の理論は、それ以前の概念論と連続性を保ちながら、それまでは決して成されてこなかった仕方で、認識の客観的妥当性を確保するという課題をはたすべきなのである。そしてこれこそが、形而上学の立脚点の組み直しとして、形而上学批判の核心をなすと考えられる。

カントの形而上学批判の内実を「概念の使用」を中心に据えて解釈する方向性は、これまで十分に展開されてこなかった。それは、形而上学批判が展開される「弁証論」が、魂・世界・神という無制約者をもとめる理性の欲求に焦点を合わせて解釈されることが多く、その前提となる「概念の使用」に向けられた批判に十分に注意が払われてこなかったからである。本論考は、こういった解釈状況に抗して、「弁証論」において「概念の使用」の批判が重要な役割を果たしていることを明らかにする。

また、カントの「カテゴリー」の理論を、それ以前の概念論との関係において考察する解釈の方向性も、これまで十分に開拓されてこなかった。おそらくその理由は、従来の解釈では、「カテゴリー」が「純粋悟性概念」とも呼ばれることの意味が、あまり深く考えられていなかったという点にある。つまり「カテゴリー」は、認識の成立におけるその役割、すなわち〈総合の機能〉という側面にのみ焦点が絞られ、一般的に理解されている「概念」とは異質なものであると解釈されてきたのである。本論考では「カテゴリー」が最終的に、一般的に理解されている「概念」の水準へと至らしめられるということを明らかにし、カントが「概念」を換骨奪胎していく様を裏付けられている。

以上のような問題意識のもと、本論考は、『純粋理性批判』の核心が「概念」に関する二重の手続き――旧来の「概念の使用」にまつわる誤謬の暴露と、新しい「概念の使用」の確立――にあるという見通しをもって、この二重の手続きの内実を解

明することを目指す。

まず第一章では、「概念」を軸とした『純粋理性批判』読解の正当化をするべく、カントの批判の根底には、〈カント以外の認識理論はどれも直観との関係を欠いた概念の使用に淵源する〉という強い主張が存していることを確かめる。テクストとして取り上げるのは、「分析論」の最終章「フェノメナとヌーメナ」と、「分析論」の付録「反省概念の二義性」である。

カントは、自分以外の様々な認識論的な立場を「現象と物自体の混同」や「超越論的実在論(transzendentaler Realism)」といった文言のもとに一括しているが、例えば合理主義と経験主義とを同一の根拠に基づける手続きの正当性は即座には理解しがたい。そこでカントが斥ける様々な認識論的な立場すべての淵源が、直観との関係を欠いた概念(カントはこれを「単なる概念(der blose Begriff)」と呼ぶ)に依拠する認識に存するということが明らかにされる。この考察を通じて、カントの認識論とそれ以外が、「超越論的観念論」と「超越論的実在論」という二項対立のもとで理解されうること、そして『純粋理性批判』の論述を「概念」を軸に解釈しうる、ということが確証される。

第二章では、「弁証論」においても、「概念」に対する批判が重要な役割を担っていることを、「誤謬推理」章をテクストとして確認する。考察は、「単純性」についての第二誤謬推理に与えられた「アキレス」(カントはこの語を「議論の主柱」という意味で用いている)という特権的な地位の意味を問う、という仕方で行われる。「誤謬推理」章の「単なる概念」に対する批判へと眼を向けることによってはじめて、この「アキレス」の意味が明らかにされる。

合理的心理学の誤謬推理がまかり通ってしまう条件としてとりわけ重要なのは、客観化不可能な統覚の形式(自我)と「思考する存在者一般の概念」とのすり替えである。このすり替えにおいて、第二誤謬推理の主題、「単純性」という徴表が決定的な役割を果たしている。というのもこの徴表は、自我を物質と区別するための「十分で必然的な徴表」として働き、自我を「対象についての概念」として捉えることを可能にしているように思われるからだ。この点にこそ「アキレス」の意味が

存する。このことに応じて「第二誤謬推理の批判」においてカントが目指すのは、自我の単純性の真相を暴露することによって、このすり替えを封じることである。このような仕方で、合理的心理学の全体は根底から破壊されるのである。

直観を度外視した概念の使用（「単なる概念」）における誤謬暴露が、旧来の形而上学の解体の基礎になっているとすれば、その裏面として、カントが目指すべき形而上学の立脚点としての新たな「概念の使用」の確立もまた、『純粋理性批判』において行われていると考えなければならない。第三章では、「単なる概念」という語の二義的用法を手掛かりとして、このことを裏付ける。

考察を通じて、①「単なる概念」が否定的に捉えられている場合と、肯定的に捉えられている場合とがあり、②両者はともに「与えられている」（S ist Pという形で定式化できる）という点で共通点を持つが、③否定的に捉えられる「単なる概念」は、A.総合判断と分析判断、B.概念と直観、C.概念的内実と対象の実在、の区別を度外視させる疑似客観である一方、④肯定的に捉えられる「単なる概念」は、上述のA.B.Cの区別を踏まえたうえで、〈確保された＝与えられている〉概念の水準へと至らしめられたカテゴリーであること、が明らかになる。形而上学とは一般的に「単なる概念からの理性認識」と規定されている。形而上学における二義性、つまり解体されるべき形而上学と構築されるべき形而上学という二つの意味は、その構成契機である「単なる概念」の二義性から説明されうる。

続いて第四章では、肯定的に捉えられる「単なる概念」の内実を、「演繹論」「図式論」に即して明らかにする。カントの概念論の基本的構図、〈ある概念（A）がその徴表（B）を介して、対象（C）に関わる〉に照らして、「演繹論」と「図式論」の役割分担を考えるならば、「演繹論」は、（A）と（C）の関係付け、「図式論」は（A）と（B）の関係付けを課題とすることが理解できる。「図式論」は判断を通じてカテゴリーを定式化する（カントがいうところの「哲学的定義」を行う）課題を担うパートであり、新たな意味での「単なる概念」を確保する現場である。図式化されたカテゴリーこそが、肯定的にとらえられる「単なる概念」、すなわち真の形而上学の立脚点をなす。

第五章では、カントが目指した形而上学の内実をより具体的に把握するために、カントにおいて、「一般形而上学」と「特殊形而上学」の関係はどうなるのか、という問題を取上げる。形而上学におけるこの区別は、カントの論敵である講壇形而上学が使用する枠組みだが、『純粋理性批判』の「分析論」と「弁証論」の区別も、これに重ねあわされている。「一般形而上学」と「特殊形而上学」の区別はどのように位置づけなおされているのだろうか。

「分析論」の末尾、いわゆる「無の表」に照らして考えてみると、「弁証論」で主題化される三つの理念、世界・魂・神は、「無」の一種、「対象を欠いた空虚な概念(思考物 *ens rationalis*)」に数えいれられることが分かる。つまりカントの形而上学においては、「特殊形而上学」の対象（世界・魂・神）は、講壇形而上学の場合のように「存在者一般（*ens in genere*)」の特殊事例として取り扱われるのではなく、「分析論」が開示する「存在者（＝現象)」 と「無」の区別のうちの、「無」の方へと位置づけられる。ただし理念が「無」に数えいれられるとしても、それは理念が無価値なものとして斥けられることを意味しない。重要なのは、この種の「無」（思考物）が「概念」として確保されている、ということ、つまりその様相を問うことができる、ということである。理念は、「実然的（*assertorisch*)」な概念ではないにせよ、「蓋然的（*problematisch*)」な概念として、「存在者」の把握に不可欠な役割を担う。カントにおいて「一般形而上学」と「特殊形而上学」との関係は、「存在者」と「無」との関係であるが、厳密に言うと、〈現象〉と〈現象の領域には決して入り込まないが、蓋然的な概念として現象の領域を支える理念〉との関係である。このような仕方で、世界・魂・神は新たな形而上学の体系のうちに位置づけられるのである。

第五章までの考察によって、『純粋理性批判』の核心は、概念に関する二重の手続き――旧来の「概念の使用」の誤謬の暴露と、新しい「概念の使用」の確立――にある、というわれわれの当初の見通しが裏付けられた。だが以上の考察は、われわれをもう一つの問題について考えることへと導いていく。

第五章までで取り上げたテクスト、すなわち「概念」を軸とした議論が展開され

ている章は、第一版固有の箇所がほとんどである。つまりこれらのテクストはことごとく第二版において書き換えられているのである。『純粋理性批判』の改訂は、「概念」を軸にした議論の削除であったといっても過言ではない。そして第五章までの考察から、改訂においてカントが議論の枠組みを〈概念・徴表・対象〉の三項関係を軸にしたものから〈認識と客観〉を軸としたものへと変えたということが確かめられうる。第六章では、このことを踏まえたうえで、この枠組みの変化がカントの形而上学構想の変遷と連動していることを裏付ける。従来の解釈において、『純粋理性批判』の改訂の意味は、書き換えがなされた各章に立脚して展開されており、改訂箇所全体の統一的な意味を問うということが果たされていなかった。これに対してわれわれはカントの形而上学構想の変遷との関連において、改訂の意味を体系的に解釈することを試みる。

第一版・第二版をつうじて、カントは「批判」が準備をするとされる「自然の形而上学」を「すべての諸物の理論的認識に関する単なる概念からの…すべての純粋理性原理を含む」学と定義している。この点に変更はない。しかし「批判」と「形而上学」の関係については変化がみられる。第一に、第一版においては、「批判」の完了が「自然の形而上学」の完成を約束するかのような語り口がみられるが、第二版においては「批判」の完了と「自然の形而上学」の完成の間には距離が設けられている。第二に、第二版になると「批判」に関しては、「方法についての論考(ein Traktat von der Methode)」という新しい特徴づけが登場する。要するにカントは第二版において、「批判」と「形而上学」を、「方法(Methode)」と「学(Wissenschaft)」という仕方で明確に区別し、議論の仕方に差異を設けている(「方法」と「学」という対概念は、カントの他の著作でもしばしば登場する)。第一版においてはこのような明確な区別がなく、「批判」と「形而上学」は議論の枠組みを共有している。このことから言えるのは、第二版で「概念」を軸とした議論を展開している章が書き換えられたのは、第二版において「批判」と「形而上学」との間で、議論の水準の明確な区別がなされ、第一版において、いわば「形而上学」と同じ水準で論述がなされていた箇所が削除された、ということである。以上のよう

な仕方で、『純粋理性批判』の改訂の意味を、「概念」および「形而上学」との関連において体系的に理解することが可能になる。

氏　　名	佐藤慶太（さとうけいた）

（論文審査の結果の要旨）

本論文はカントの主著『純粋理性批判』の全体を「概念」という語の用法に注目し精細に分析することによって綿密に読みなおした業績である。こうした独自な方法によって、従来正面から扱うことが困難であった「フェノメナとヌーメナ」「反省概念の二義性」「誤謬推理」の三つの章に解明を与えることが可能となり、また最終的にはこの書の第１版から第２版への大幅な書き換えはなぜおこなわれたのか、というカント解釈上の大きな問題へ独自の解釈が提出されていることが本論文の成果として特筆されねばならない。論者の特色は「概念」の問題に焦点をあわせることでカントにおける「形而上学」の位置と性格を確定する手段を発見したことであり、この着眼点は全編ゆるぎなく貫かれて、叙述に統一性と奥行きとを与えることに成功している。もともとカントと形而上学との関係はデリケートな問題であって、従来この問題を論ずる場合にはしっかりとした枠組みがないまま、「形而上学」という言葉に各人各説の恣意的な内容が読み込まれてしまう傾向があった。これに対して論者はハイデガーやハイムゼートのようにあらかじめ特定の形而上学を持ち込むのではなく、またアディッケスのように単に世界観という程度の茫漠たる意味におわるのでもなく、テクストの中からカントにとってなにが形而上学であったかをあぶりだしていくという手堅い文献学的な方法を用いている。

以下、本論文の主要論点とその評価を簡単に述べたい。『純粋理性批判』という書は一方でカントの認識論を体系的に論述するものであるが、他方で他の哲学者の学説への批判を重要な構成要素として含んでいることはよく知られている。カント哲学をいわば立体的に理解するためにはこのような他の哲学者への批判の部分をも視野に収めることが望ましいことは言うまでもないことであり、この場合とくに重いウェイトを持っているのはライプニッツ哲学あるいは「ライプニッツ－ヴォルフ哲学」と呼ばれる学説への批判である。しかしカントとライプニッツ哲学とのかかわりはかなり錯綜していて一筋縄では取り扱うことができない。論者はこの問題に

対して上記のように「概念」という語が『純粋理性批判』においてけっしてニュートラルな術語としてだけ用いられているのではなく、特に「単なる概念」という形態ではある特定の哲学上の立場、すなわち「ライプニッツーヴォルフ哲学」を指すために使用されているという事実を先行文献を踏まえつつ用例を収集・検討して確定する。これによって「フェノメナとヌーメナ」「反省概念の二義性」「誤謬推理」の三章がそれぞれ、この意味での「概念」が生み出した仮象の諸相として一体的な仕方で捉えられることになっている。これは『純粋理性批判』解釈で内容不分明として回避されてきた箇所にゆたかな哲学的メッセージを発掘したものとして高く評価できる（第１章、第２章）。

次に論者はカントの「概念」には上のような否定的な用法だけではなく、カント哲学そのものを担う肯定的な用法もまたあることを明らかにする（第３章）。ここでも先行文献を踏まえつつ、そこから学んだものに独自の新展開を加えるという論者の方法がよく発揮されている。それが第４章で超越論的演繹論および超越論的図式論の読解として具体的に提示されている。すなわち論者によればカント概念論は二項対立的ではなく、「ある概念Ａがその徴表Ｂを介して対象Ｃにかかわる」という意味で三つの項を考えるものであり、演繹論はＡとＣ、図式論はＡとＢの関係付けを課題としている、という明快な整理を論者は与えている。こうして従来敬遠されがちであった図式論は「概念」の観点から見直され、はっきりと規定された役割を果たすパートとして肯定的に捉えられることになる。つまりここで分析判断に終わらない「単なる概念」の基礎付けが得られたと見られるのである。論者はここで『純粋理性批判』の核心部分へも自己の読み筋を通すことに成功し、難解をもって鳴る箇所にフレッシュな洞察を与えている。

論者にとって「概念」の問題はすなわち「形而上学」の問題であるが、上述の論点が「形而上学」に関してなにを教えるか、という点について、論者は概念の二面性に対応した「旧来の形而上学」と「新たな形而上学」という観点を導入する。概念の肯定的な用法に基づいて建設される「新たな形而上学」では「旧来の形而上学」のテーマであった「魂」「世界」「神」は存在者ではなく、いわゆる「無の表」に属

せしめられること、しかしそれはこれらの理念が無価値であるということを意味せず、蓋然的な理念として存在者の把握に不可欠な役割を担うものとして概念の体系のうちに位置づけられる、という結論が示されている（第５章）。ここでは従来なくもがなにしか捉えられてなかった「無の表」の位置づけが初めて体系的に行なわれえたという点が注目すべき点である。

最後に『純粋理性批判』はなぜ書き換えられねばならなかったのかという古来の問題に関してもまた論者は「批判」と「形而上学」という軸を設定して、第１版では両者はいわば連続的に捉えられていたのに反し第２版では両者は明確に水準を異にしたものと面目を一新しているという重要な指摘を行なっている。論者は第２版における書き換え箇所がもっぱら「概念」が主役を演ずる箇所であったという重要な発見に基づいてこのことを主張しているのであり、これは概念観の進展がカントの形而上学構想の進展を知るための指標たりうるという極めて興味深い論点を形成している。

このようにして論者は『純粋理性批判』の重要箇所および従来ネグレクトされてきた箇所に対して一貫した観点から論及し、またいくつかの問題を解決し、もってその観点の有効性を証拠立てている。昨今このようなコメンタリー形式のカント研究の衰退が目立つなかで、正攻法による哲学史的研究によって掘り出されるべき多くのことが残っていることを明らかにした点で本論文の価値は大きいといえるだろう。

とはいえ、望蜀の言がないわけではない。論者がキーワードとしているのは「形而上学」であるが、たしかに論者の方法によってカントが批判し斥けようとする形而上学の姿はかなり明瞭に捉えられているものの、それではカントは論者の言う「概念の積極的用法」によっていかなる形而上学を建設しようとしていたのか、という点は本論文ではいまだ十分に明らかにされてはいない。論者はそれが備えていなければならない形式面のことは精細に論じているが、内容的に見て、どこがそれほどカントが自負しえたものであるのかを解明してはいないのである。

しかしながらこれらの点は提出者の今後の課題に属するものとして敢えて留保さ

れていると見るべきであろう。本論文はその設定した課題を果たし、任務を全うしている。この点のみならず実は本論文には今後優に数本分の論文に展開されるべき着想がちりばめられており、論者の今後の研鑽によって展開されることが十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年9月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。